

●平成 27年度一般前期試験(英語)講評

ねらい

大学で求められる基本的な学力を試すことを念頭に、センター試験とは異なる視点で総合的な英語力を問う。具体的には、長文の内容を素早く読み取り、その要点を日本語・英語で簡潔に表現する力や、未知の語彙を文脈の中で推測する力、自分の考えを英語で論理的に表現する力を試すことをねらいとしている。

I

全体講評

昨年も指摘したように、「日本語で質問されている問題」へは、質問の意図を理解し、ある程度は的確な解答がなされていた。しかし、「英語で質問されている問題」へは、「質問の意図」がよく理解されていないと思われる解答や、「指定された語数」で解答していない答案が多く見受けられた。今後の入試問題では、学習指導要領の改訂にともない、「英語での質問」が増えてくると考えられるので、「英語での質問」に的確に解答できる練習をしておくことが必要である。

また、「日本語で質問されている問題」の解答の中にも、「解答に書かれている日本語の意味」がよく理解できないもの（日本語の主語と述語の繋がりが不明瞭な解答；日本語で解答をしてはいるが、問題文の英文を直訳しているような解答）が散見された。日本語で解答を行う時は、答案に書いた自分の日本語を再度読み直して、主語と述語のつながりがおかしくないか、修飾語の位置がおかしくないか等の確認をしっかりと行うようにすること。

「英語で質問されている問題」に関しては、「英文の質問文」の中に「ヒントになる単語・句・節」がだいたい含まれている。したがって、「英文の質問文」をよく読んで、問題の英文中から、「英文の質問にある単語・句・節」と同じような単語を見つけ、その箇所を中心にしっかりと読解を行った上で、問題文中の「適切な箇所」を「解答」として答えるといい。

各設問について

【I】の問題文は異文化摩擦と対応について書かれた文である。本学にふさわしい内容であると考え。国際文化を考える時、文化摩擦や異文化対応について考えることは必須であるからである。比較的分かりやすい英文で、論理的に書かれているので、順を追ってきちんと読んでいけば、たとえ見慣れない語彙があったとしても読める内容である。受験技術に走って飛び飛びに読んだりすると却って分りにくいものになってしまう。

設問1 語彙問題。文脈の中で語彙の意味を問う問題である。平均的な正答率は70%くらいであろう。日頃から文脈の中で語彙の意味を考えるようにしておく必要がある。英英辞典を引いて英文を書き換えてみる練習をすることも役に立つ。

設問2 英問英答問題。本文に対する英語での質問に英語で答えるものである。

1の問題: 問題の英文に to describe a person who is living in a new culture という記述があるので、本文の1行目に同様な記述を見つければ、そのあとの部分に説明があるということに気づく。その部分を文中から抜き出している解答が多いが、本文を参考にしながらその内容をまとめた英文が書けるようになることを希望する。何某かの解答をしているものの満点の解答が少ない。正答率は50%くらいである。

2の問題: 「どんなタイプの人が新しい国(文化)によりスムーズに適応できるか」という問いに対して、筆者の考えの全体を汲み取った回答はほとんどなかった。筆者は3つの具体例を提示しているが、受験生のほぼ半数が1例目の“A flexible, tolerant person”だけを答え、2例目の“a person whose culture and language are similar to those of the new country”を含め、2つの例を挙げた受験生は僅か30%程度だった。一部だけを見て全体を見ない傾向は相変わらず強い。パラグラフ単位で、的確にポイントを掴む練習を普段から心がけることが大切である。

3の問題: おおむね正解の解答が多く見受けられた。英文での質問ではあるが、質問部中の“a roller coaster”がキーワードになる。本文でキーワードを探していくと、“The experience can be like riding a roller coaster”の文章が見つかる。あ

とは文脈に沿って、その後ろにある、“People can ~ in a very short time”が“a roller coaster”の比喩的な言い換え表現に気づけば正解にたどりつける問題である。

4の問題: stress, fatigue, and tension あるいは bewildered and disoriented などの表現に気付くことが重要である。本文中の表現を利用して答えれば良いが、bewildered や at times を誤って書き写している受験生が少なからずいた。答案を見直すことで防げる単純なミスである。

設問3 英文和訳問題。下線部だけを見るのではなく、きちんと前後関係を見て解釈する必要がある。これを怠ると、下線部中の代名詞が何を指し示しているのかわからなかったり、あるいは省略を推測できなかつたりする。

和訳②

語句の理解不足のために、部分的に誤りがある答案が多かった。主語の Those は「人々」という意味であって、「これらの～」ではない。(ちなみに、from the beginning を日本語で表記する時は「初めから」であって、「始めから」ではない。)次に動詞の find は第5文型を作る動詞であり、その目的語は the second year で、補語は easier である。これをきちんと訳せることが肝要である。理由を表す because で始まる従属節にある used to は「～するのに慣れて」という意味であって、「かつて～した」ではない。もしそうなら to の後は原型動詞のはずである。特別な勉強は要らない。学校で習うことを完全にマスターすれば、満点が取れる問題である。

和訳③

文脈から省略を補って考えなければならぬ文章だ。前後関係から “when, in fact, it is not (similar)” と similar を補って考える必要がある。また、when は「同じだと思っている」と「実際は同じではない」ということが同時におこっていることを表しているので、「～する時」と訳すと少し奇妙になるので「～であるのに」と考えると分かりやすくなる。their country of origin の of origin が their country を後置修飾していて「彼らが元いた国」と捉えられないで、「国の起源」と誤訳したものが多くみられた。正答率は約 60%であった。

和訳④

関係代名詞の省略を含む主部と述部を的確に見分けることができるかどうかが内容把握のポイント。全体的には比較的正答率は高く、約 70%であった。適切に解答できなかった受験生の特徴は、①主部においては、関係詞の省略を読み取れていない②述部においては、“relationships” が3つの “with” と結びついていることを見抜けていない、ということにあった。単語をばらばらに覚えるのではなく、他の語とのつながりで理解するように心がけることが大切。

II

全体講評

「ねらい」にある「要点を日本語・英語で簡潔に表現する力や、未知の語彙を文脈の中で推測する力」を試す問題に加えて、文法・構文理解を試す問題も含まれている。毎年、記述式の問題に対する正答率が極端に低いので、その種の問題の正答率を上げることで全体の点数アップが可能となる。記述式問題に対する解答作成においては、英文を理解する読解力のみならず、日本語力や文章作成能力も必要とされる。短期間で養える力ではないので、日頃の学習を大切にして、継続した学習を通して養って頂きたい。

各設問について

【II】の問題文は、「グローバル人材」というものをどのように捉えるべきかについて論じた文章である。昨今の社会状況からするとタイムリーであり、且つ我々が国際社会の中で普遍的に考えておくべき本質を端的に述べた文章である。このような内容の文章は日本文でも読むことができるはずである。基本的な知識の習得だけでなく、日頃から英語に限らず多様な文章を読み、自らの意見をまとめるといった学習を積み重ねるべきであろう。

設問1

ここで問われているのは、いわゆる一般論ではなく“IMD が考える” global person である。したがって、書かれている英文を正しく理解し、日本語で説明すべきである。第2段落に D. Turpin 氏 (= president of IMD) がインタビューで語っているという部分があるので、その内容が書かれている部分は、It represents ~ attitude の部分であることがわかる。そこを日本語でまとめれば良いことになる。crystal-clear という言葉が clear を強調した言葉だと理解できていない解答が見られた。正答率60%。

設問2

revenue の意味を選ぶ問題。選択肢と文脈から「お金」に関する語彙であることが推察できるだろう。もし、この語を知らない場合には、文脈から正解を探るほかない。この語のあとから comes from ~ とあるので、入ってくる方の「お金」ということが推察できる。正答率は50%。

設問3

headquarters という単語を知っている必要がある。UN や IOC の例が出ているので推測はしやすいと思うが、必須語彙であろう。また、bodies が「団体」という意味で使われることも知っておくべきである。正答率70%と高かった。

設問4

“to tell them stories”の中に、“stories”というキーワードがあることに気づくことができるかできないかが、この問題に正解できる鍵になる。キーワードに気づくことができれば、あとは文脈に沿って英文を読んでいくと“and give the relevant stories of ~ countries”の箇所にとどろつき、正解できるはずである。正答率は30%~40%。

設問5

この問題は下線部(5)の“successful CEOs”の後に、“almost always those good stories”と成功を収めた CEOs がどのような人達であるかが書いてあるのであるから、その箇所を詳しく和訳していけば正解にとどろつける問題である。正答率60%~70%。

設問6

7割近くの答案が零点であった。その理由は、non-native English speakers が discouraged になる理由を答えていたからである。less を見落としていたために、答えが全く逆になっていた。たとえ、less を見落としていても、文章の流れからも自分の答案が不自然だと気付くようであればならない。結局のところ、文章を読む訓練が不足していると感じられた。大学での学術研究においては、文章を読むことが中心である。受験生には英語(と日本語)の文章を注意深く読む訓練を怠らないようにして頂きたい。

設問7

Turpin 氏の発言の最後の部分 “...what’s most important is to get engaged. Don’t be quiet.”に注目できれば正解にとどろくことができる。しかし、get engaged の捉えられない解答が多かった。次の言葉の Don’t be quiet. から考えるべきだ。get engaged は「従事する→積極的に関わる→黙っていないで積極的に発言する」と捉える必要がある。正答率は30%~40%であった。

設問8

第13パラグラフを要約すれば即ち Turpin 氏が日本に留学した理由になる。2つのポイントがあろう。一つは “to be different”で、「人との違いを求めた」ということだ。もう一つは “I want to know these things.”で、「世界1になりつつある日本の内実を知りたかった」ということだ。この2つを踏まえた解答は多くはなかったが、正答率70%程度であろう。

設問9

第15パラグラフについて、「日本企業の強みと弱みがどのように書かれているか」という問いに対して、筆者の指摘を十分に読み取れた回答は極めて少なかった。正答率は55～60%。読解問題のほとんどについて言えることだが、やはり部分的な読み終わっているという印象は否めない。この問いに対する回答で改めて認識したことは、普段から社会に対する関心が乏しく新聞を読む習慣がない、ということ。“minorities”や“white-collar workers”という用語についての不十分な理解は、明らかに、英語力以前の、英語力の土台の欠如である。日常から、社会・政治・経済などを含め自分の身の回りで起こっている出来事などに目を配っていることが大切。

設問10

文脈から語彙の意味を判断する問題。近年、積極的に解決しなければならない難題という意味でよく使われるようになった challenge である。正答率80%。

設問11

文脈から語彙の意味を判断する問題。mindset は、一般の必須語彙とは言えないが文脈の中で捉えることができるかどうかを問うた問題になっている。選択肢が少なかった所為もあるとは思いますが、正解率90%と高かった。

III

全体講評

大学入学後に必要となる英文構成法に基づいて、論拠・理由を示しながら自分の考えを論理的に英語で表現できるかを試した。

例年出題している形式の問題であるので、対策はやり易いはずである。今回も昨年と同じように、(A)明確な構成を持った、複数のパラグラフから成る短いエッセイを書くこと、そして、(B)問題Iと問題IIの英文内容を基にして書くこと、を要求した問題となっている。例年と異なる点は分量が300語～350語に増やされた点である。今後この量が基準になると考えられる。

また、もう一つの対策法としては、(1)日頃から(日本語や英語の文章を)読むこと、(2)読んだ内容に対して(批判的に)考えること、(3)読んで感じたこと・考えたことを書くこと、を習慣化することである。これによって読解力や分析力が深まり、入試対策のみならず、深みのある学力(あるいは教養)が養えると期待される。

答案作成についての講評

書き方や構成については問題文に具体的に指示があるので、それに従って書くことが肝要である。ただ、いきなり書き始めるのではなく、まず、全体の流れ・概略(アウトライン)を考えること。それに基づいて書き終えたら、スペルミスがないか、文法(特に動詞の時制、主語との数の一致など)に誤りがないか、そして求められていることに対する確かな内容のエッセイになっているか、という点をチェックしながら推敲して頂きたい。

この問題に全く手をつけていないものも見られた。他の問題への時間配分からこの問題を切り捨てるという対策的なものであればやめるべきだ。今後英作文への取り組み状況も判定得点に反映することも考えられる。